

国立国語研究所学術情報リポジトリ

三字漢語の構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野村, 雅昭, NOMURA, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001029

三字漢語の構造

野村 雅 昭

1. 三字漢語を問題にする理由

これから報告しようとするのは、昨年、筆者が本研究所の報告として発表した論文「複次結合語の構造」*¹の内容と密接なつながりを持っている。すなわち、同論文で筆者が試みたのは、新聞語彙調査*²のデータの一部分から、三つ以上の構成単位（語基）からなる語を抜き出し、それぞれの単位がどのような順序で結合しているかを明らかにすることであった。ただし、そこでは、結合順序のパターンを一般式化することとパターンの出現確率をとらえることに重点をおいたため、そのようなパターンを出現させる要因となった、個々の構成単位の性格や意味的な結合関係などについては、問題点を指摘したのみで、深く言及しなかった。これから問題にしようとするのは、複次結合語を構成する単位が、語構成上どのような性格を持っており、それがどのような関係で結合するかということであり、その意味で前記の報告を補完するものである。

ここで三字漢語を考察の対象にする理由は、次のようなものである。前記の調査で明らかにしたことであるが、4単位以上の語の多くは、2単位語と3単位語との結合からなっており、しかも、そのほとんどが漢語（字音語）であることから、複次結合語の構成要素となっている、二字漢語・三字漢語に着目する必要がある。このように考えれば、種類・量とも多くを占める二字漢語の分析から着手しなければならないが、現代語では、二字漢語の多くは、一語基相当の機能しか有せず、個々の単位に分解することは、語源や成立にかかわる問題である。それに比較して、三字漢語は、二字漢語と一字漢語に分解が可能で

* 1 国立国語研究所報告 49『電子計算機による国語研究Ⅴ』所収。

* 2 同報告 48『電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)』等に報告がある。

あり、分析の対象となりやすい。

これまで、二字漢語の性格について言及したものはあっても、三字漢語についてのそれは、あまり多くなかった。その理由は、二字漢語が現代語の語基として安定した位置を占めているのに対し、三字漢語には、臨時的な結合単位という意識がともなうことによると思われる。しかし、先ほど述べたこととは逆に、三字漢語の中には、二字漢語と一字漢語に分解することがむずかしく、二字漢語と同様に意識されると見られるものも少なくない。たとえば、宇野義方が昭和三十年と昭和四十八年に大学生を対象として調査したところでは、「自転車」という語を「一続きのもの」と答えた被調査者が五十名中三十名を越えており、「自転-車」のように切れると答えたものは、十数名にすぎないという結果が出ている*³。同様の傾向を示しているものには、「代議士」・「当事者」などがあり、現代人の三字漢語に対する意識の一端をうかがうことができる。

一字漢語が語基としての機能を失っていなかった明治時代には、他の一字漢語と結合して、多くの二字漢語が造り出されたことは、周知の事実である。宮島達夫は、現代語でよく使用される語のうち、漢語の大部分は、明治期までに造られたものであり、大正期以降に生まれた語で基本語の中に含まれるものは、むしろ、外来語のほうに顕著であることを指摘している*⁴。たしかに、宮島の言うように、新しい二字漢語を生み出す力は、大正期以降、漢語系の語基には失われていると見てよいであろう。ただし、宮島が依拠したデータでは、「自転車」のような語は、「自転」と「車」に分けて採集されており、三字漢語を1単位として見た場合には、多少その様相を異にするのではないと思われる。すなわち、すでに形成された二字漢語と結合力を失っていない一字漢語とが結合して、三字漢語を造り出すことによって、新しい概念を外来語によってまかなう方法と対抗しつつあるというような事態も考えられないではない。しかし、その一方では、早く成立した三字漢語の中には、さきにあげた例のように、語構成意

* 3 宇野義方「語の切り方」(立教大学「日本文学」30号)

* 4 宮島達夫「現代語いの形成」(国立国語研究所論集『ことばの研究3』所収)

識が薄れ、二字漢語と同様に、一種の複合語基化しているものも存在する。以上のような問題を解明することは、現代語の語彙の構造を考える上で、ぜひ必要なことだと思われる。

もっとも、これから行なう報告は、三字漢語の全貌をとらえるというような大規模なものでなく、手元にある少数の資料をもとにした、実験的なものであり、前回の報告と同じく、方法論的な興味が中心となっていることをことわらなければならない。これによって、現代漢語を記述する手がかりをつかもうというのが、実のところ、本論の率直な目的である。

2. 三字漢語の構成要素

前節に述べたような問題を検討するために、以下では、三字漢語を二字漢語と一字漢語に分解し、次の(1)～(3)の立場から分析する。

- (1) 三字漢語の構成要素となっている二字漢語と一字漢語は、構文上の単位を構成する上で、どのような形態的な特徴を持っているか。
- (2) 二字漢語と一字漢語との結合には、どのようなタイプが存在するか。
- (3) 上の(1)・(2)は、三字漢語の構造によって、どのように異なるか。

上の(3)にいう三字漢語の構造とは、次のようなことをさす。すなわち、三字漢語の構成要素である個々の一字漢語がどのような順序で結合しているかを考えると、次の二つの型が考えられる。

I 型 $\langle (\bigcirc + \bigcirc) + \bigcirc \rangle \cdots (a_1 + a_2) + a_3$: 文化人・機関車・事務員・現代的

II 型 $\langle \bigcirc + (\bigcirc + \bigcirc) \rangle \cdots a_1 + (a_2 + a_3)$: 腸結核・急停車・不完全・各隊員

すなわち、すでに結合している二字漢語に一字漢語が後部分として結合したものをI型、前部分として結合したものをII型とする。同じ三字漢語の構成要素であっても、それぞれの型によって相違があるはずである。特に、一字漢語は、前部分にくるものと後部分にくるものとは、性質を異にすることが予想される。

ところで、三字漢語には、この二つの型以外の構造を持ったものがある。一つは、「雪雪花・松竹梅・市町村」のように、それぞれの漢語語基が対等の資格

で一次結合しているものである。「有頂天・金輪際・不世出・未曾有」のように、本来の語構成意識が失われているものも、これに準じて考えることができよう。もう一つは、「重軽傷・陶磁器・祖父母」のように、二字漢語が結合して三字漢語化したものである。三字漢語の構造を記述するためには、これらについても当然ふれるべきであるが、データに出現した量がきわめて少ないため、以下に述べるような方法では、対象となりにくいので、除外することにした。

三字漢語を構成する二字漢語と一字漢語を、以下では、主語基・副語基とよぶことにする。漢字一字によってあらわされる単位（字音）が、現代日本語で、形態素に相当すると仮定しても、そう大きな誤りをおかしているとは言えないであろう。ただし、それが語基としての機能を有しているか否かについては、多少、疑問がのこる。なぜならば、漢字によってあらわされる単位の多くは、自立あるいは派生して用いられることが少なく、二字漢語の造語成分としてしかあらわることがないからである。それに対して、和語や外来語の形態素は、一形態素が一語基に相当することが多い。たとえば、いわゆる同義語や類義語と言われる語のセットでは、「まずしい/貧乏」・「はやり/流行」・「スポーツ/運動」・「チャンス/機会」のように、和語・外来語の語基と二字漢語が対になることが少なくない。また、形態上からも、二字漢語は、和語や外来語の語基と似た派生や結合のしかたををするところから、現代語としては、二つの形態素が結合して、一語基相当の資格を得ているとみられる*⁵。

一方、一字漢語は、自立して一語基相当に用いられるものから、「不○○」・「○○的」のように、接辞に近いものまで、さまざまなレベルが存在する。また、「外人/外国人」のように、二字漢語中の用法と三字漢語中のそれとに明確な一線を引きがたいものも多く、語基とよぶことには問題が残るが、二字漢語を主語基と呼ぶのに対して、かりに副語基という名称を与えておくことにする。

* 5 森岡健二は、漢字語基どうしの結合形を複合語基とよび、語構成上の機能は、単一語基とまったく対等だと考えられるとしている。「日本文法体系論（11）」（『月刊文法』1巻13号）

3. 三字漢語の用法

データに出現した三字漢語を原文中の形態別に示したのが、表1である。データとは、新聞語彙調査の一部分である、昭和41年の朝日新聞朝刊(1月～6月)の社会面に出現した、約8,000語(異なり数)である。単位は、長単位(文節から付属語を除いた部分とほぼ等概念)を採用している。

表1 データ中の三字漢語の出現数 ()内の数字はパーセントをあらわす。

形 態 型	自 立	派 生 (～スル・～ナ)	結 合① (～+□)	結 合② (～+□)	計
I <(○+○)+○>	430(71.2)	42(6.9)	55(9.1)	77(12.8)	604(100.0)
II <○+(○+○)>	86(68.3)	16(12.7)	5(3.9)	19(15.1)	126(100.0)
計	516(70.7)	58(7.9)	60(8.2)	96(13.2)	730(100.0)

データ中の三字漢語がどのような形態で出現したかによって、次の(1)～(4)に分類した。

- (1) 自立……いわゆる格助詞を伴うもの。
- (2) 派生……接辞や付属的要素を伴うもの。
- (3) 結合①…語基相当の1最小単位と結合したもの。
- (4) 結合②…語基相当の最小単位どうしの1次以上の結合形と結合したもの。

(2)は、大部分がいわゆる形容動詞やサ変動詞の語幹となるものである。新聞語彙調査では、形容動詞の活用語尾を備えていないものは、名詞としているので、(1)に属するものでも、「○○○ノ」というような形態しかとらず、格助詞のガやヲを伴うことがないものも含まれる。また(3)や(4)の語基相当の最小単位には、和語や外来語も含まれるので、「不動産屋」・「ジェット旅客機」のような結合形の部分となっている三字漢語も採集の対象となる。また、同一の三字漢語が、(1)～(4)にまたがって出現する場合も、それぞれ一回と数えてあるので、「不景気が」・「不景気な」・「不景気風」・「不景気対策」のような場合の「不景気」は、各用法ごとに1回ずつ出現したことになる。

表1によれば、I型<(○+○)+○>とII型<○+(○+○)>では、出現

数に大きな差があることがわかる。Ⅱ型の出現数は、Ⅰ型の約4.8倍であり、Ⅱ型にくらべてⅠ型は出現しにくい。前回の報告で、漢語最小単位のみからなるものだけではなく、和語・外来語の最小単位を含みかつ漢語最小単位を含む3単位語をも合せて集計を行なったところ、Ⅱ型は、Ⅰ型の約4.4倍という結果が出ている。したがって、漢語構成要素のみからなる三単位語すなわち三字漢語には、和語や外来語のそれを含む場合よりも、Ⅰ型を出現させにくい理由があると考えられるが、その理由については、以下の章で考える。

各用法別の出現数では、(1)に属するものがⅠ型・Ⅱ型とも、約70パーセント、内外の比率を示している。二字漢語の場合は、今回のデータでは計算していないが、総合雑誌の語彙調査の際の分析*⁶によると、出現度数10以上の二字漢語のうち、単独の用法として出現したものは、約45.6パーセントであるから、それにくらべると、三字漢語のほうが結合力が弱いと言えよう。しかも、この単独の用法の中には、本論で派生としたものの一部も含まれている。

派生の用法では、Ⅰ型とⅡ型の全体に対する割合がかなり異なり、Ⅱ型のほうが出現率が高くなっている。その原因は、前部分にくる一字漢語と後部分にくるそれとの性格の違いによるものとみられるが、それについては後にふれることにする。結合の用法では、4単位語の部分となるものが、Ⅱ型では、極端に少ないのが目につくが、データが少数なので、これ以上の考察はひかえることにする。

4. 主語基の性格

データにあらわれた、三字漢語の構成要素となっている二字漢語を形態上の特徴によって分類したのが45ページの表2である。表の数値について考察を加える前に、二字漢語がどのような資格で構文上の単位となるかを考えてみることにする。

二字漢語の多くは、一般の品詞分類では、名詞に属するとされている。もっとも、国語辞典などの中には、いわゆる形容動詞やサ変動詞の語幹となるもの

* 6 国研報告13「総合雑誌の用語・後編」

には、その区別をしているものもあるが、それが名詞として自由に格助詞をとるかどうかについては、あまり問題にしていない。たとえば、ある国語辞典では、「高貴」という語のように、「～ナ」「～ノ」の両形をとるものは、名詞とし、「高尚」のように、「～ナ」という形しかとらないものは形容動詞語幹としているが、この二語のちがいは、前者が「～ノ」という形をとることのみであって、そのちがいは、ほとんどないものと思われる。さらに、「紺碧」という語は、現代語では、「～ノ海（空）」というような用法しかないと思われるが、どの辞典もみな名詞扱いをしている。

また、「臨機応変」や「周章狼狽」のような四字漢語の成分である、「応変」や「周章」を独立の見出しとしてたててある辞典も少なくない。これらは、「臨機ノ」・「狼狽スル」のように、一方の成分が単独で用いられることがあるために、「支離滅裂」や「一衣帯水」のような語にくらべれば、分離意識がはたらくものと思われるが、現代語では、「応変スル」・「周章スル」のように単独で使われることは、漢文調の文章でなければ、ほとんどないであろう。

以上に述べたことは、現行の辞典の欠陥を指摘するためではなく、二字漢語が複雑な性格を持っており、それを分類するにあたっては、周到的配慮が必要であるということを述べたかったからである。たとえば、すでに本論で用いてきた、「自立」とか「派生」という用語ひとつにしても、その定義は、かんたんではない。

森岡健二は、語の中の語基の機能に着目して次のように述べている^{*7}。

結局、複合語 (complex words この中に接辞のつく派生語と助辞^{*8} のつく屈折語が含まれる) の構成法が、語基を分類するのに有効な原理となるという結論に達した。具体的にいえば、自立形式の語基は、その屈折の方式によって、また結合形式の語基は、その派生の方式によって、それぞれ、表 (paradigms) を作成することができ、これによって語基を分類することができるということである。

* 7 「日本文法体系論 (10)」(『月刊文法』1 卷 12 号)

* 8 いわゆる助詞と「だ・らしい」など助動詞の一部をいう。

以下では、データに出現した主語基を、森岡の分類を参考にしつつ、五類に分け、その複合形である三類を合わせて、八つの類に分けてみる。なお、森岡は、「結合」「派生」などという語を、独自の概念規定によって用いているが、本論で筆者が用いるそれは、一般的な用法に従う。

A類…ガを伴って自立する。ヲを伴うか否かは判定の規準としない。その理由は、後のC類に属するものとの区別ができなくなるからである。例：映画・議員・社会・学校・政治・婦人

B類…ナを伴って派生する。また、他の類には属さず、ノを伴って派生する。このグループには、いわゆる形容動詞の語幹とよばれるものが多く属する。例：有力・繁華・貴重・臨時・高度・満員

C類…スルを伴って派生する。いわゆるサ変動詞の語幹がこれに属する。サ変動詞の語幹はA類にも属するものが多いが、次にあげるような例は、現代語では、一般に、ガを伴って用いられることがないか、あっても文語的であったり、略語的な意識が伴ったりすると考えられる。例：圧倒・発起・平行・視聴・品評・浮動

D類…単独で文節を構成する。または、ニ・トを伴う形で派生する。この類には、ノを伴って派生し、B類にも属するものもあるが、重複させないことにした。例：絶対・万一・同時・一体

F類…自立・派生の用法を持たず、結合形の部分としてのみ用いられる。例：顕微(鏡)・文部(省)・喫茶(店)・外航(船)・従業(員)・新入(生)

A B類…例：必要・危険・安全・親切・自由・自然

A C類…例：討論・使用・指定・投書・研究・駐車

B C類…例：共通

以上の類別に主語基を分類したのが、表2である。のべ語数の計が表1と一致しないのは、「不景気が・不景気な・不景気風・不景気対策」などの「不景気」を1回として数えたためである。もし、他に「好景気」という例があれば、「景気」という主語基は、ことなり1回、のべ2回、出現したことになる。

全体では、A類がもっとも多く、A C類がそれにつぐ。他では、F類がやや

表 2 主語基の用法別分類

型 類	I 型<(○+○)+○>		II 型<○+(○+○)>		計	
	ことなり	の べ	ことなり	の べ	ことなり	の べ
A	188	217	75	82	263	299
B	14	15	5	5	19	20
C	10	10	—	—	10	10
D	3	3	1	1	4	4
AB	5	5	4	4	9	9
AC	184	225	24	24	208	249
BC	1	1	—	—	1	1
F	65	80	1	1	66	81
計	470	556	110	117	580	673

多い程度で、そのほかの類は、きわめて少ない。ことなり数とのべ数では、大きな違いが見られないので、以下では、主に、ことなり数を問題にする。

I 型と II 型では、主語基の分布に、明らかな差が存在する。すなわち、A 類と AC 類が大部分を占める点では共通しているが、I 型では、A 類と AC 類の比率がほぼ等しいのに対して、II 型では、A 類が 68.2 パーセントで、AC 類の 21.8 パーセントをはるかに引き離している。また、I 型では、F 類が 13.8 パーセントを占めているのに対し、II 型では、わずかに 1 例あるのみである。

このような違いを説明するためには、副語基との関係に立ち入らなければならないが、詳しくは後の章にゆずることにして、簡単にふれておくことにする。AC 類は、サ変動詞の語幹としても用いられるものであるが、三字漢語中の成分としては、A 類とほとんど区別がないように見える。しかし、I 型の場合には、「入居（者）」・「参拝（客）」・「洗たく（機）」のように、なお動作性を有することが多い。それに対して、II 型では、「（新）記録」・「（重）労働」・「（癌）手術」のように、動作性を失って、実体概念視された用法が多く見られる。つまり、同じ AC 類であっても、I 型では、C 類に近く、II 型では、A 類に近いものが多い。このことから考えると、II 型で A 類の比率が高いことは、II 型の構造そのものに、主語基の性格を規定するような要因が含まれているように思われる。

これと同様のことは、F 類の場合にも言える。II 型で 1 例出現しているのは、

「(不) 思議」だけである。「不可分」・「不世出」などとは、多少、構造を異にするものの、現代語では、あるいは、副語基と主語基に分けることができないと見るべきかもしれない。この1語を除けば、II型には、F類が存在しないことになる。F類の語には、いくつかのタイプがある。一つは、「通産(省)」・「原水(禁)」のように、本来、略語として生まれたものだが、「通産(大臣)」・「原水(協)」のように、他の単位とも結合しうるため、一応、語基の資格を得ているものと思われるものである。もう一つは、「顕微(鏡)」・「公德(心)」・「当事(者)」のように、現代語では、特定の単位としか結合せず、語基としては不完全な性格を持ったものである。これらのタイプに属するものの数は、決して少なくはないが、もっとも多いのは、次のようなタイプである。

たとえば、「具体」という語は、使用頻度も高く、基本的な語のように考えられる。しかし、「具体と抽象」というような表現では、単独であらわれるかもしれないが、ほとんどは「具体(的・性・化・例・案)」というように、他の単位と結合してしかあらわれない。その点では、先の「顕微(鏡)」と同じだが、特定の単位とだけでなく、種々の単位と結合するために、形態的には不安定であるが、語基としての資格を得ているものである。データにあらわれた、この類のものとしては、「合理(化)」・「自主(性)」・「有機(物)」・「先進(性)」・「機動(力)」・「本格(的)」などがある。これらの特徴は、属性的な概念をあらわすところにあり、B類やC類と共通するものを持っている。

少数ではあるが、B類やC類はI型に多く、特にC類は、II型には見られない。C類に属する語は、「浮動(票)」・「慰霊(祭)」・「視聴(率)」・「交差(点)」・「圧倒(的)」のような例である。これらは、A類としての用法がないとは言いきれないが、その場合でも、「～スルコト」のような意味が伴い、動詞からの転成名詞に例えることができるだろう。

以上のような点で、I型に属する主語基には、属性概念的な内容を指す語がかなり含まれるのに対し、II型では、実体的な概念を指す語が圧倒的に多いことが指摘できる。

三字漢語の成分である二字漢語のこのような傾向が、単独で出現する二字漢

語とどのように異なるかについて比較する資料を、ここには持たない。ただし、主観的な印象で言うならば、B類に属するものが、三字漢語中には、やや少ないように思われる。データに出現した例は、「変則(的)」・「独自(性)」・「多様(化)」・「(不)明朗」などのように、接辞性をおびた副語基と結合して、三字漢語としても、さらに「～ナ(ノ)」・「～スル」という形式で派生するものが多い。「貴重(品)」・「有力(者)」・「繁華(街)」のように自立する例は、予想よりも少なかった。これらB類に属する二字漢語は、単独で、「～ナ(ノ)」という形で派生する用法をもつばらとし、結合力はあまり強くないのかもしれない。同様のことは、「堂堂(ト・タル)」・「洋洋(ト・タル)」のような派生的用法を持つものにも言えよう。ただし、これらには、「威風堂堂」・「前途洋洋」のように、四字漢語中の成分となる用法はあるように思われる。

5. 副語基の性格

主語基の場合にならって、データ中の副語基を分類してみる。大別すると、a…自立するもの、b…結合の用法しか持たないもの、c…派生の用法を持つもの、および、それに準ずるものようになる。ただし、bとcを小区分したので、計7類になる。

a類…ガを伴って自立する。本来、略語であっても、ガを伴うことのできるものは、含める。例：客(宿泊～)・券(招待～)・塔(管制～)・署(消防～)/核(～実験)・市(～当局)

b₁類…字訓との明確な対応を持つ。字訓と字音とにずれがあったり、文章語的な字訓を持つものは含めない。例：祭(慰霊～)・薬(睡眠～)・堤(防波～)・金(入学～)/低(～姿勢)・新(～兵器)

b₂類…字音しか持たない。自立形式をとることもまれにあるが、慣用句的であったり、漢文脈的な色合いをおびたりする。例：士(運転～)・生(小学～)・業(養蜂～)・科(社会～)/総(～工費)・副(～院長)

b₃類…接辞性が強く、結合形全体を派生語の語基化する。例：的(根本～)・視(絶望～)・用(防音～)・中(作業～)/不(～十分)・小(～規模)

b₄ 類…b₂ と同じ性格を持つが、本来、略語から生まれたもの。例：大（女子～）・選（知事～）・鉄（地下～）・展（写真～）/日（～教祖）

c₁ 類…ナ（ノ）・スルを伴って派生する。主語基のDと同じく、ニを伴うものもここに属させるべきだが、一例も出現しなかった。例：別（各県～）・産（国内～）/他（～学部）

c₂ 類…主語基との結合力が弱く、連体詞的な性格を持つ。例：各（～方面）・同（～少佐）

上の区分は、必ずしも厳密なものではなく、かなりあいまいな部分を残している。b₁ とb₂ の違いである、字訓との対応を有するか否かという点もその一つであるし、c₁ に属するか否かという判定もむずかしい。たとえば、データに出現しない例であるが、「現段階」という場合の「現」は、「現に」という派生語を形成するが、これをb₂ とc₁ のいずれに属させるかというような問題がある。さらに、「現会長」となると、c₂ 的な色彩を帯びてくる。このような場合には、主語基と同様に複合型を設けるべきであろうが、データに出現した結合形中の用法によって一義的に分類した。たとえば、「美意識・男性美」の「美」はa、「美少女」の「美」はb₁ ということになる。一字漢語の性格を記述するには、上のような分類では不十分なことはいうまでもないが、ここでは、主語基と副語基の結合タイプをとらえるための便宜的な方法として考えてみたというにすぎない。

表 3 副語基の用法別分類

型 類	I 型<(○+○)+○>		II 型<○+(○+○)>		計	
	ことなり	の べ	ことなり	の べ	ことなり	の べ
a	37	150	8	19	45	169
b ₁	32	120	11	36	43	156
b ₂	64	191	11	20	75	211
b ₃	7	77	8	20	15	97
b ₄	10	16	1	1	11	17
c ₁	2	2	1	1	3	3
c ₂	—	—	2	20	2	20
計	152	556	42	117	194	673

集計の結果を表3に示す。全体では、 $b_2 \cdot a \cdot b_1$ 類の順に、ことなり、のべとも多く出現する。ことなり数では、この三類に集中する傾向が強いが、のべ数では、 $b_3 \cdot c_2$ などがふえ、 b_2 への集中度がややさがっている。I型では、 b_2 に属するものが、ことなり、のべとも多く、 b_3 がのべでことなりよりも高い比率を占めているのが特徴的である。II型では、ことなりでは、 $a \cdot b_1 \cdot b_2 \cdot b_3$ の四類に比較的平均して集中しているようにみえる。のべでは、 b_1 への集中度が高くなり、 c_2 がことなりにくらべて、ひじょうに高い比率を占めているのがめだつ。

主語基の場合には、ことなりとのべでは、ほとんど差がなかったのに対して、副語基では、かなりの違いがみられる。その理由は、一字漢語は、もともと種類が少なく、種々の二字漢語と結合することのできる、接辞的な性格を持ったものから、特定の語としか結合しないものまで、結合力に程度の差が見られるためである。それに対して、二字漢語の場合は、三字漢語中の成分としてしかあらわれることがなく、しかも、多くの一字漢語と結合する用法を持つものの割合があまり高くないこと、および、種類が多いことに起因していると思われる。

主語基の場合に、A類に属するものがもっとも多かったのにくらべて、副語基では、a類に属するものは、あまり多くない。特に、II型では、かなり少ない。これは、単独で用いられる一字漢語の絶対量が、二字漢語にくらべて少ないことにも関係あろうが、特に、自立して用いられるものの少ないことをも反映していると思われる。I型に属するa類には、「(水道)局」・「(鉄道)省」・「(技術)部」のように、略語として自立するものも含まれるが、三字漢語の成分となった場合には、自立性はあまり強くなく、 b_2 類との差は、ほとんど感じられない。このような傾向は、単独では自立性が強い、「(大臣)席」・「(婦人)会」・「(商品)券」の場合でも、程度の差はあるが、認めることができる。II型の場合は、「性(犯罪)」・「核(戦争)」・「法(医学)」のように、I型よりも自立性が感じられないでもないが、和語や外来語が前にくる三単位語(「夏野菜・朝火事・タタシ」・「会社・カメラ部品」)にくらべると、結合体としての安定性にとぼしく、また、

種類も少ないため、三字漢語の副語基として出現しにくいと考えられる。

I 型で、a に近い性格を持っているのが b_1 である。「(胚芽) 米」・「(衛星) 船」・「(機械) 力」・「(合格) 品」などは、字音として自立することはないが、自立性の強い和語の語基を字訓としてもつために、a とともに、和語や外来語の語基に比較的接近した性格をそなえている。ただし、訓との対応はあっても、「(退職) 者」・「(浮遊) 物」・「(点線) 内」・「(家族) 間」などになると、意味が形式化し、 b_2 や b_3 に近いものもある。しかし、概して、I 型ではこのように体言的な字訓と結びつくものが圧倒的に多く、「(同区) 立」のような、用言的な訓はあらわれにくい。

これに対して、II 型では、 b_1 は出現率がもっとも高く、a に属するものの少なさを補っているようにみえるが、I 型の b_1 とは異なる性格を持つ。I 型の b_1 と共通性をもつものは、「女 (教師)」・「前 (車輪)」など少数である。ほとんどは、「新 (傾向)」・「低 (気圧)」・「大 (病院)」・「同 (世代)」・「乱 (反射)」・「再 (調査)」のように、属性概念をあらわす和語と対応する字訓をもつもので、主語基に対して修飾的な機能を有する。このことは、さきに述べた、II 型の主語基に A 型・AC 型が多いことと表裏の関係にあるものとみられる。

b_2 の場合も、 b_1 と同じく、I 型には体言的な語基、II 型には、修飾的な語基が多い。II 型にみられるものは、「本 (会議)」・「副 (読本)」・「助 (教授)」・「全 (理事)」などで、 c_2 の連体詞的なものと連続性がある。I 型に属するものは、種類が多く、三字漢語の副語基として、中心的な位置を占める。この中には、「(大使) 館」・「(書記) 長」・「(応接) 室」のように、古くは、あるいは最近まで字訓との対応をもっていたものも含まれるが、「(授業) 料」・「(会社) 員」・「(芸術) 家」・「(都心) 部」・「(歴史) 学」などは、字訓との対応を持たず、広く主語基と結合しうることによって、意味を抽出することが可能であり、現代語には欠くことのできない語基となっているものが多い。また、「(一貫) 性」・「(管理) 面」・「(革新) 系」のように、形式化した意味をあらわすものには、 b_3 と近い機能をもつものもみられる。

b_3 は、種類は少ないが、結合力が強く、結合形全体が属性概念をあらわす派

生語の語基となるものが多い。「(大衆)化」・「(理想的)」・「(構造)上」・「(飛行)中」・「(俸給)外」・「有(意義)」・「小(規模)」などがそれである。ただし、II型では、「不(注意)」・「無(条件)」・「非(能率)」のように、否定の意味をもった副語基に、この傾向が顕著であり*⁹、他の種類は多くない。他の種類に属するものとしては、ほかに、「超(満員)」・「正(反対)」などがある。ただし、これらは単に語彙的な意味を添えるだけの機能しか持っていないとみることもできよう。この問題については、別途に考えることにしたい。

b₄ 類は、I型にみられる。II型の例は、「日(教組)」だけである。この類も多くはないが、新聞などでは、漢字の視覚的機能にたよった、「(予算)委」・「(地震)研」・「(安保)理」などの用法がみられる。本論では、b₂に含めたが、「(計算)機」などは、本来は、略語から生まれたものと考えられる。逆に、もともとの用法が失われたり、漢字と意味との対応があいまい化したりする場合には、「(入選)作」・「(受信)料」のように、「作品」・「料金」の略語だと意識されるものもある。

c₂ 類は、種類は少ないが、各種の語につきやすく、のべ語数では多数を占める、II型に特有の副語基である。データに出現したものは、「同」・「各」の二種だけだったが、「当学会」・「本〇〇日」・「故〇〇氏」・「前委員長」などの例があげられる。この類は、二字漢語だけでなく、二次以上の結合形や、数詞や固有名詞を含んだ結合形にも接続しうる点で、b₂ 類とは異なるが、さきもふれたように、完全に不連続とはいえない。この類の特徴として、結合形を構成する際に、発音に切れ目があることや、後続語のアクセントが変化しないことをあげることもあるが、「現時点」などの例を考えると、決定的なメルクマールにはならないとも言える。

c₁ に属する、「ナ(ノ)」・「スル」を伴って派生するものは、きわめて少数である。単独の場合の例としては、「変ナ」・「信ズル」などがあげられるが、主語基

* 9 否定の意を伴う接辞性の強い語基の用法については、下記の小論で考察を加えた。

「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」(国立国語研究所論集『ことばの研究(4)』所収)

の場合のD類と同じように、三字漢語の成分とはなりにくいようである。

以上に述べたところをまとめれば、I型に属する副語基は概して実体概念的であり、II型のそれは属性概念的であるといえよう。ただし、II型にも、自立的なものが少数ではあるが存在する。また、I型には、実質的な意味を失い、結合形全体を派生語の語基化するはたらきをもつものもみられる。

6. 主語基と副語基の結合

これまで、主語基と副語基が単独で語を構成する際に、どのような形態的な特徴を持つか、また、どのような意味をもっているかということを考えてきた。そのまとめとして、三字漢語中で、主語基と副語基が結合する際に、どのような類型が存在するかを、ここでは、問題にする。問題の性質上、まず、I型とII型のそれぞれについて傾向を見ることにする。

表4-1 主語基と副語基の結合パターン・I型 <(○+○)+○>

後部分 前部分	a	b ₁	b ₂	b ₃	b ₄	c ₁	c ₂	計
A	63	30	86	26	10	2	—	217
B	1	2	7	4	1	—	—	15
C	5	3	1	1	—	—	—	10
D	—	—	1	2	—	—	—	3
AB	—	1	3	1	—	—	—	5
AC	60	65	65	32	3	—	—	225
BC	1	—	—	—	—	—	—	1
F	20	19	28	11	2	—	—	80
計	150	120	191	77	16	2	—	556

I型の結合パターンを表4-1に示す。計の欄の556という数字は、データに出現したI型に属する三字漢語の総ことなり数である。すなわち、表2・表3のI型ののべ語数の計と一致する。総語数に対して、出現確率が10パーセントを超えるのは、次の五つのパターンである。この五つのパターンで、全体の61.2パーセントを占めていることになる。

○A+b₂ (15.5%)……例:会社-員・議員-団・芸術-界・動物-園・
文化-財

○AC+b₂ (11.7%)……例:裁判-官・作業-員・演出-家・経営-権・
表彰-状

○AC+b₁ (11.7%)……例:通行-人・担当-者・巡視-船・通勤-時・
避難-所

○A+a (11.3%)……例:役員-会・学校-差・政府-案・限界-点・
赤痢-菌

○AC+a (10.8%)……例:停止-線・集荷-量・競争-率・沖積-層

上の五つのパターンを第一グループとすると、第二グループとして、出現率が5パーセント前後の四つのパターンをあげることができる。3パーセント台以下のパターンは、一括して、第三グループとする。

○AC+b₃ (5.8%)……例:計画-的・修理-中・避難-用

○A+b₁ (5.4%)……例:文明-国・機械-力・権利-金

○F+b₂ (5.0%)……例:代議-員・合理-性・新入-生

○A+b₃ (4.7%)……例:全国-的・機械-化・業務-上

この第二グループには、第一グループには含まれなかった、Fやb₃が顔を出す。第二グループに属するものの比率は、20.9パーセントである。したがって、I型に出現した三十一のパターンのうち、上位の九パターンで、約71パーセントを占め、残りの二十二パターンが、第三グループとして、約29パーセントを占めることになる。

以上に見たように、I型の三字漢語に出現する確率の高いパターンは、いずれも、出現頻度の高い主語基と副語基のグループの組み合わせからなるものが多いという、いわば当然の結果を示している。しかし、部分的に見ると、全体の傾向とはややくいちがう出現率を示しているものもある。たとえば、□+
b₁型に属するパターンは、全体で556例中120例(21.6パーセント)あるのに対して、A+b₁型は、A+□型217例中の30例(13.8パーセント)しか占めていない。また、AC+b₁型は、AC+□型の28.9パーセントを占めており、全体にくらべてかなり高い比率になっている。この差が統計的に有意なものかどうかはともかくとして、その理由として、次のようなことが考えられる。

その前に、この場合ほど大きな差ではないが、 $\square + b_2$ 型の出現率にも注目する必要がある。 $\square + b_2$ 型は、全体で 191 例 (34.5 パーセント) を占めているが、 $A + b_2$ 型は、39.6 パーセントとやや高く、 $AC + b_2$ 型は、28.9 パーセントと下回り、ちょうど、 $\square + b_1$ 型の場合と逆の傾向を示している。したがって、この問題を説明する要素として、 $A \cdot AC \cdot b_1 \cdot b_2$ の 4 類を考えなければならない。

この不均衡現象の原因は、第一に、 $AC + \square$ 型の性格に求めることができる。 AC は、自立して実体視された概念をあらわすことができるが、サ変動詞の語幹ともなりうるため、属性的な概念をもあらわすことができる。一方、 b_1 や b_2 は、実体概念をあらわすことが多く、 $AC + b_1$ 、 $AC + b_2$ は、修飾語 + 被修飾語という関係を持ちやすい。たとえば、「 $\bigcirc\bigcirc$ 者」という語は、 $AC + b_1$ 型に多くみられるが、「利用-者」・「入居-者」・「入学-者」・「退職-者」・「合格-者」のように、「 $\bigcirc\bigcirc$ スルモノ」と言いかえることが可能である。このような意識は、おそらく語形成の際の事情が結合形が成立した後にも潜在的に残っているために生じるものと考えられる。すなわち、 $AC + \square$ 型には、副語基に実体概念をあらわす自立性の濃い語を要求する傾向があるとみてよかろう。その傍証として、 $A + \square$ 型の中で、 $A + a$ が 29.0 パーセントを占めているのに対し、 $AC + \square$ 型で、 $AC + a$ 型の比率が 26.7 パーセントとほとんど差がないことをあげることができる。もちろん、 $AC + b_2$ 型には、「運転-手」・「請求-権」・「活動-家」のように、自立性に欠ける副語基と結合する例は存在するが、全体として、 $AC + b_2$ が $A + b_2$ よりも少ない比率を示しているのは、上に述べたような事情を裏書しているものとみられる。

これに対して、 $A + \square$ 型の場合は、 A の自立性が明確なだけに、必ずしも副語基に自立性の濃いものを要求することなく、和語や外来語の語基と同じく、実体概念 + 実体概念という構造を取ることが可能である。 $A + b_1$ 型には、「現代-人 (現代ノひと) 」・「機械-力 (機械ノチカラ) 」のように、単純な言い換えができるものも存在する。しかし、「 $\bigcirc\bigcirc$ 者」に例をとれば、「労務-者 (労務ニタズサワルモノ) 」・「被害-者 (被害ノアッタモノ) 」のような言い換えは、「利用

「者」などの例にくらべると、単なる言いかえの域をこえて、説明に近くなることは否定できない。一方、 $AC+b_1$ には、「化合-物」・「出発-前」・「合格-品」のように、「〇〇者」と同様な構成をもった例をいくつもあげることができる。

I 型における、パターンの出現率にみられる、一種の不均衡は、このように説明することができる。この点を除けば、他は、おおむね、主語基と副語基の出現頻度に比例していると言えよう。ただし、 $B+\square$ 型だけは、 $B+a$ 、 $B+b_1$ という型が少なく、上のような説明とは矛盾する例がみられるが、例が少数なので、臆断をさけて、より多くのデータを分析する際に考慮することにした。

II 型の場合の結合のパターンを、I 型と同様に、表 4-2 に示す。総数が少ないため、統計的な分析は無意味だと思われるので、大まかな傾向だけをとらえることにする。総語数の 10 パーセント以上を占めるパターンを、第一グループとし、その他を第二グループとする。第一グループに属するものは次の五つのパターンである。

$\circ b_1+A$ (20.5%)……例:新-空港・大-動脈・低-気圧・怪-文書・
女-店員

$\circ c_2+A$ (17.1%)……例:各-政党・同-少佐

$\circ b_2+A$ (12.8%)……例:総-戸数・副-会長・全-責任・半-地下・
中-学校

$\circ a+A$ (12.0%)……例:核-戦争・性-犯罪・党-各局・都-教組・
区-議会

$\circ b_1+AC$ (10.2%)……例:重-労働・大-号令・新-記録・乱-反射・
再-検討

II 型では、 $\square+A$ という型が 70.0 パーセント、 $\square+AC$ という型が 20.5 パーセントを占めているため、出現するパターンは、ほとんどが、この両型で占められ、 $\square+A$ という型が上位にならぶ。出現パターン十五のうち、この第一グループの五パターンに属する語で、全体の 75.2 パーセントに達する。

第二グループに属するパターンの中では、 $b_3+\square$ 型が種々の主語基と結合し、他とは異なる分布をしている。これは、主として、 b_3 類の副語基「不」の

表 4-2 主語基と副語基の結合パターン・II型 <○+(○+○)>

後部分 前部分	A	B	C	D	AB	AC	BC	F	計
a	14	—	—	—	—	5	—	—	19
b ₁	24	—	—	—	—	12	—	—	36
b ₂	15	—	—	1	—	4	—	—	20
b ₃	7	5	—	—	4	3	—	1	20
b ₄	1	—	—	—	—	—	—	—	1
c ₁	1	—	—	—	—	—	—	—	1
c ₂	20	—	—	—	—	—	—	—	20
計	82	5	—	1	—	24	—	1	117

機能によるところが大きい。たとえば、b₃+B(不- 十分・不- 明朗)・b₃+AB(不- 親切・不- 自由)などである。その他のパターンは、b₃+F(不- 思議)・b₂+D(万- 万一)のやや特殊な例を除けば、先に述べたように、いずれも、□+A・□+ACのどちらかに所属することになる。

7. 三字漢語の意味的構造

前章では、三字漢語中の語基の結合パターンを主として量的な側面から問題にしたが、ここでは、意味的な関係を分析することにする。三字漢語中の語基は、一般の品詞分類では、名詞に属する。しかし、いわゆる名詞に属する語によってあらわされる概念内容は、必ずしも一様な性質とは言えない。これを、言語主体による概念把握の態度によって分ければ、実体的概念としてとらえられる内容を表わすものと、属性的概念とみとめられる内容を表わすものというような考え方^{*10}も可能である。たとえば、よく問題にされる、「たいせつなのは健康だ」・「かれはとても健康だ」の「健康」が同一の語か否かということも、前者を実体視した用法、後者を属性視した用法のように考えれば、両方の性格を備えた語という説明で解決できると思われる。

しかしながら、本論でこれまでとってきた方法は、語基が語を構成する際に、

^{*10} 水谷静夫は、このような考え方に基き、いわゆる形容動詞語幹を属性概念をあらわす語とし、形容動詞否定論の一つの根拠としている。

(「形容動詞弁」・『国語と国文学』28巻5号)

どのような形態的特徴をもつかという観点にたつての分類であって、いま述べたような概念内容を機械的にあてはめるわけにはいかない。たとえば、AC 類に属する語基に、I 型の場合と II 型の場合では、相違があることは、すでに指摘した。また、b₁ 類に属するものにも、I 型と II 型で異なる性格をもつ傾向がある。そして、副語基の中には、接辞的な性格をもち、概念性に乏しく、上のような分類が困難なものも存在する。

このような問題があることを承知の上で、以下では、前章でとらえた結合パターンが、どのような概念をあらわす語基の結合からなりたっているかを分類してみることにする。したがって、それぞれのパターンの代表的な傾向によって分類するわけで、例外的なものは、切りすてることになる。接辞的な語基は、実体概念・属性概念のどちらにも属させず、独立させることにする。このようにして、I 型・II 型のそれぞれで出現頻度の高いパターン（I 型の第一・第二グループ、II 型の第一グループ）を分類してみると、意外に少ない類型からなりたっていることがわかる。

○類型 1 …実体概念的語基+実体概念的語基： $A+b_2 \cdot A+a \cdot A+b_1/a+A$

○類型 2 …属性概念的語基+実体概念的語基： $AC+b_2 \cdot AC+b_1 \cdot AC+a \cdot F+b_2/b_1+A \cdot c_2+A \cdot b_2+A \cdot b_1+AC$

○類型 3 …実体概念的語基+接辞的語基： $A+b_3$

○類型 4 …属性概念的語基+接辞的語基： $AC+b_3$

類型 1 は、いわゆる名詞+名詞の構造に近く、和語や外来語にも、多くみられる形式である。斎賀秀夫は、複合語の結合要素の意味的關係として、(1)並立・(2)主述・(3)補足・(4)修飾・(5)補助・(6)客体の六種をあげている^{*11}。そして、斎賀があげている例によると、実体概念どうしの結合には、「並立」の關係にあるものが多くみられる。たとえば、「朝- 晩」・「隣り- 近所」・「親- 兄弟」・「住所- 氏名」・「土地- 家屋」などである。しかし、この類型 1 には、並立の關係にあるものは、ほとんどなく、斎賀のいう「修飾」の關係にあるものが多数を占める。

*11 「語構成の特質」（『講座現代国語学 II』所収）

次のような例である。

団体- 客・学生- 服・助手- 台・水道- 局・婦人- 会・胚芽- 米・衛星- 船・機械- 力・映画- 館・宗教- 家・事業- 団/核- 兵器・区- 役所・性- 犯罪

これらは、前部分の語基が、後部分の語基の種別をあらわすという点で共通性をもつ。II型に属するパターンに、この類型に属するものが少ないのは、自立性をもった一字漢語には、種差をあらわすよりも、類概念をあらわす傾向をもつものが多いためと考えられる。

また、例中の「映画館」・「宗教家」のような $A+b_2$ に属する類を、斎賀は、「補助」関係とよび、「〇〇的」・「〇〇化」のような、 $A+b_3$ 類と同質のものとみる。しかし、概念性の明確さという点では、 b_2 類に属するものを語基とみて、修飾・被修飾関係とみてよいと思う。ただし、 $A+b_1$ 、 $A+b_2$ に含まれる、「同僚- 間」・「数年- 後」・「人間- 性」・「理科- 系」などは、補助関係とみることもできよう。これについては後述する。

類型2に属するものは、もっとも種類が多く、I型・II型のどちらにもみられる。

修正- 案・使用- 量・解決- 策・焼死- 者・輸送- 力・左折- 車・永住- 地・虚脱- 感・混血- 児・新入- 生・従業- 員/低- 気圧・大- 災害・怪- 文書・重- 労働・再- 審査・全- 責任・総- 工費・各- 政党・同- 法案

これらの場合も、先の分類によれば、修飾関係とみられる。ただし、類型1と異なる点は、前部分の語基が後部分の語基の性質・状態などを規定する関係にあることである。特にその傾向は、II型の各パターンに明確である。この点に、前部分にくる属性概念的語基と、実体概念的語基の相違がみとめられるのである。ただし、 $AC+\square$ 型のパターンに属するものでも、「労働- 省」・「執行- 部」・「運送- 店」・「解剖- 学」などの場合は、実体概念的であり、類型1の種差＋類概念の関係と同様にとらえることができよう。このことは、 b_1+A 型の「女- 教師・女- 店員・前- 車輪」などについてもいえる。

少数ではあるが、I型に属する、 $B+\square$ 型・ $C+\square$ 型などの場合も、「貴重-

品・上等- 兵・不動- 産・浮動- 票・戦没- 者」などのように、この、性質を規定する修飾関係に該当するものが多い。

類型3と類型4との相違は、ほとんどないといってよい。すなわち、斎賀のいう「補助」関係にあるものがほとんどである。主語基が実体概念的であるか、属性概念的であるかによって、 b_3 の種類が異なるというような現象も、「○○中」という例が類型4にやや多く見られるのを除いては、ほとんどない。ただし、用例を豊富に集めれば、その差があらわれるかもしれない。

○類型3…精神- 的・家庭- 用・午前- 中・業務- 上・俸給- 外・大衆- 化

○類型4…活動- 的・送信- 用・新築- 中・課税- 上・予想- 外・絶望- 視

この類について問題になるのは、 $\square + b_1 \cdot \square + b_2$ にみられる、接辞性の強い副語基との相違である。たとえば、これまでもふれた、「○○間」・「○○後」・「○○性」・「○○系」・「○○面」などは、概念内容が形式的であり、 b_3 類に近い性格をもっている。これまで、これらを、 b_3 類と別扱いにしてきた理由は、結合形全体に自立性語基と同等の資格を与えるということであった。しかし、これらの中でも、「○○性」のように、前部分の語基に、属性概念的語基をとる傾向の強いものがあることは注意しなければならない。「○○性」という語は、「人間- 性」のような用法もあるが、多くは、「一貫- 性・前進- 性・独自- 性・合理- 性・耐病- 性」のようにAC・B・F類の語基と結合することが多く、属性概念的語基と結合して、全体を実体概念化する点に特徴をもつ。「帰国後」のように、ACを主語基としてとるものも、これに含めてよいであろう。

一方、 b_3 類は、上にみたように、前部分にくる主語基に特定の傾向はないが、実体概念的語基をも、結合形全体として属性概念化させるところに特徴がある。たとえば、「○○化」という語基は、今回のデータでは、あまり使用例が多くないが、新聞語彙調査全体のデータによれば、「集中- 化・固定- 化・正常- 化・活発- 化・合理- 化」などの属性概念的語基と結合する例とともに、「映画- 化・機械- 化・近代- 化・工業- 化・大衆- 化」のように、実体概念的語基と

結合する例も多くみられる。

もちろん、実体概念的語基 + b_3 類が属性的概念のみをあらわすのではなく、「設備の機械化_がおくれる」・「石油は、家庭用_がが不足している」のように、実体概念視される場合もある。しかし、結合形全体を属性概念化するという点では、共通性をもっている。その点では、 $\square + b_1 \cdot \square + b_2$ などとは、一線を描すが、前部分にくる主語基の語性を変えるという意味では、「○○性」などは、接辞的語基とみてもよいであろう。

例は少ないが、II型における、 $b_3 + \square$ のパターンも、接辞的語基が後部分にくる語基の性格を変えるという点で、この類型3・4のグループに含めることができよう。II型の前部分にくる b_3 類は、量的には、後部分に属性概念的語基をとることが多いが、「不- 景気」・「無- 条件」・「大- 規模」・「有- 意義」のように、実体概念的語基と結合して、全体を属性概念化する用法をもつ。特に、その傾向は、「無・不・未・非」などの否定の意味を伴う語基に顕著である*¹²。

このように、三字漢語中の主語基と副語基の意味的な結合関係は、修飾関係と補助関係にかぎられ、語基が実体概念的であるか属性概念的であるかによって、多少の相違がみられるにすぎない。この事実を、二字漢語や四字漢語、あるいは、和語・外来語の結合関係にくらべて特徴的なものと言える。先に、斎賀の六分類のうち、並立関係にあるものがほとんどないことを指摘したが、同様のことが「補足」関係や「客体」関係の場合にも言いうる。

上の類型化の分類で特徴的なのは、後部分に属性概念的語基をもつパターンがないことである。補足関係というのは、「島- 流し・ひじ- かけ・子供- だまし・機械- 編み・バター- いため・映画- 見物・写真- 判定」のように、前部分が後部分に対する客語になる関係を言い、後部分には、いわゆる居体言やサ変動詞の語幹がくるものである。その意味で、属性概念的語基が後部分にくることの少ない三字漢語には、この関係がみられないわけである。例外として、わずかに、 $a + AC$ 型（核- 保有）・ $A + c_1$ 型（国内- 産）などがあるのみである。

*¹² この問題については、前注*9の論文で詳述した。

また、客体関係とは、二字漢語に特有のもので、「愛- 国・殺- 人・婦- 国・就- 職」のように、属性概念的一字漢語と実体概念的一字漢語が結合したものである。ところが、三字漢語では、属性概念的語基+実体概念的語基という結合パターンが多く出現するにもかかわらず、修飾関係をとるために、客体関係とみられるものはない*13。語基の意味的な結合順序という点では、 $b_3 + \square$ 型は、この客体関係と似ているが、用法的には異なること、前述のとおりである。

このような特徴は、三字漢語を構成する語基、とりわけ、これまで副語基とよんできた一字漢語の性格に起因するものとみられる。すなわち、三字漢語中の一字漢語は、特にⅠ型において、実体概念性を有するにもかかわらず、自立性に乏しい。また、Ⅱ型では、属性概念的な内容をあらわすものが多く、実体概念的なものはあらわれにくい。そして、属性概念的内容をもつものでも、動詞として派生したり、動詞訓との対応をもつものが少ないことも、特徴としてあげることができる。さらに、主語基である二字漢語では、先に述べたように、属性概念的内容をあらわす語基が後部分にこないことが、上述のような意味的結合関係を構成させる原因と考えられる。

一方、接辞的語基を含む形式は、量的にはそう多くはないが、三字漢語の一つの特徴をなすものである。この接辞的語基は、二字漢語だけでなく、二次以上の結合形や他の語種とも自由に結合することができ、日本語の語基として、特色のあるものと言えよう。

以上、三字漢語を構成する語基の性格、結合の意味的関係についての素描を行ってきたが、はじめに述べたように、今回の報告で対象としたデータは、きわめて少数であり、量的にも質的にも不十分なものである。以上の論を裏づけるためには、大量のデータを必要とすることは、言うまでもない。さいわい、本研究所で現在進行中の現代新聞の漢字調査では、漢字によって表記された語

*13 データには出現しなかったが、「脱- 社会」・「反- 政府」などは、一種の客体関係とみられる。しかし、二字漢語の場合とは、ずれが感じられる。

基についての豊富な使用例を利用しやすい形で示すことができるように、作業を進めている。小論は、ここで用いた分析方法を、大量の資料を対象として、現代漢語、さらには、現代語の語彙構造を記述する際に有効なものとするための、一つの試行的報告である。

(73. 11. 27)